

顕浄土真実教文類一（一）

高田短期大学学長 栗原 廣海

一、標挙の文と目次

今回から「教文類」を拝読していきたいと思います。最初に標挙の文と、本書全体の構成をあらわす目次が示されます。

大無量寿経 だいむりょうじゆきやう 真実の教 しんじつのきやう
 浄土真宗 じゆつしんしゆう

顕真実教 一
 顕真実行 二
 顕真実信 三
 顕真実証 四
 顕真仏土 五

の三部経と名づく。弥陀の三部はこれ浄土の正依経なり。
 と、「浄土三部経」と称することの正当性を主張しておられます。

親鸞聖人も、法然上人を受けて『無量寿経』『観無量寿経』『阿弥陀経』を「三部経」と呼び、ご自身が構築された教理体系のなかに組み込んでおられますが、法然上人とは違う親鸞聖人の教えの特色は、積尊の教えの本意をあらわす「真実の教」は『無量寿経』であり、この経に説かれる弥陀の本願念仏の教えこそが「浄土真宗」と名づけることのできる唯一の教法であると示されていることです。このことは、本文においては「それ真実の教を顕さば、すなわち『大無量寿経』これなり」と明確に示されているところです。

そして、その『無量寿経』に説かれる真実を明らかにするために、「顕真実教一」から「顕真

浄土教を説く経典は数多くありますが、中でも『無量寿経』『観無量寿経』『阿弥陀経』は、古来より最も重視されてきた経典でした。それが「浄土三部経」と呼ばれるようになったのは『選択本願念仏集』の次の文によります。

初めに正しく往生浄土を明かす教というは、
 いわく三経一論これなり。「三経」とは、一には『無量寿経』、二には『観無量寿経』、三には『阿弥陀経』なり。「一論」とは、天親の『往生論』（浄土論）これなり。あるいはこの三経を指して浄土の三部経と号す。

そして、「三部経」の名は、「法華の三部」「大日の三部」「鎮護国家の三部」「弥勒の三部」などがあることを挙げ、

いまはただこれ弥陀の三部なり。ゆえに浄土

仏土五」までの五巻が著されるとともに、最後の巻として「顕化身土六」が置かれています。この巻は正式には「顕浄土方便化身土文類六」で、前五巻とは対照的に「方便」を説く巻です。具体的には「浄土三部経」の他の二経である『観無量寿経』と『阿弥陀経』における方便の教えが書かれていて、一見、真実を明らかにする『無量寿経』の内容を示す巻ではないかのような印象を受けます。しかし、『無量寿経』が説く阿弥陀如来の本願には、真実とともに、直ちに真実を受け入れることのできない人のために、真実に導くための方便が誓われています。

「顕真実行二」以下の各巻の標挙の文には、その巻の内容が『無量寿経』に説かれる弥陀の四十八願のうちどの願の成就をあらわしたものが明示されています。「真実行」は第十七願「諸仏称名の願」の成就、「真実信」は第十八願「至

心信樂の願」の成就、「真実証」は第十一願「必至滅度の願」の成就、そして「真仏土」は第十二願「光明無量の願」と第十三願「寿命無量の願」の成就であることが示されています。

それに対して、方便を説く「願（方便）化身土六」の標拳の文には、「無量寿仏觀經（觀無量寿經）の意なり」として第十九願「至心発願の願」が、「阿弥陀經の意なり」として第二十願「至心回向の願」が示されています。つまり、『觀無量寿經』は第十九願を説く經典、『阿弥陀經』は第二十願を説く經典であるが、ともに第十八願の真実に導く重要な方便の經典として『無量寿經』に内包されているということになるわけです。その意味で、「願真実教一」から「願化身土六」までの標記は、『教行証文類』の目次であるとともに、『教行証文類』全体が『無量寿經』の教えを詳述したものであることを明示していると考え

と選号に明記されています。「文類」と言うのは、經典や論釈から必要な部分を引用して、それを集めたものいうことで、『教行証文類』全体のほとんどを占めています。その集められた経論釈のところどころに聖人自身の解釈（一般に「御自釈」と呼んでいます）が挿入され、この両者によって『教行証文類』全体は構成されています。選号の「集」とは、あくまでもこの書物が、釈尊やインドの論師、中国・日本の高僧によって説かれた真実の言葉を集めたものであって、自分の思想・信条を記述したものではないことを遜へりくだつて示されたものと言うことができますでしょう。

次に本文に入りますと、浄土真宗という仏教とはどのような仏教なのか、端的に示されています。それは二種の回向であって、二種の回向とは、「往相の回向」と「還相の回向」であると言うのです。

られます。

二、題号・選号と浄土真宗の大綱

願浄土真実教文類一

愚禿釈親鸞集

謹つつしんで浄土真宗を案ずるに、二種の回向あり。一は往相、二は還相なり。往相の回向について真実の教きょうぎ行信証あり。

（つつしんで浄土真宗という仏教をうかがうと、弥陀の本願力のはたらきとしての二種の回向があります。一つは往相回向であり、二つは還相回向です。その往相回向には、真実の教と行と信と証があります）

浄土の真実の教えを説く経は『無量寿經』であることをあらわす経文を集めたのがこの巻であり、それを集めた人が親鸞聖人であることが題号

では「回向」とはどういうことなのでしょう。

原語（サンスクリット語）は「パリナーマナー」で、「転回する」「変化する」「進む」などの意味の語ですが、その漢訳である「回向」は、「回え転趣しゆ向」の意とされ、「自ら修めた功德を自らの悟りのために、または他者の利益のためにめぐらし、さし向けること」であると一般的には解釈されています。つまり、「回向」は、一般的には仏道を行ずる行者が、自力で行う行のことを言っているのです。

しかし、親鸞聖人は、このような一般的な意味とは全く異なった解釈をしておられます。聖人における「回向」とは、阿弥陀如来が本願力をもって、自らの徳を衆生にふり向け、救うはたらきであるとされているのです。

詳細は次回を期したいと思います。